

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／村井 万里子

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

大学で教員養成の仕事に携わって今年度25年目に入る。24年間の成果をまとめるために半期の「内地研究員」資格を得たので、前半期は研究のまとめに全力を挙げる。「科研」5期15年ほど仲間とともに続けてきた「言語能力の発達研究」もこの研究のなかに含まれる。「研究のまとめ」によって、新しい、的をしぼった科研テーマの発見・構築を可能にしたい。現在考案のテーマは、大学における自分の授業で実際に試してきたことを、他の同領域専門研究者に向けて伝えることである。これによって汎用性を広げ有用性を実証したい。内容は以下の3項目である。

- ①「言語モデルを用いた目標・評価」の見据え方の汎用性開発
- ②学習者の「表現」を読み取る「創造的評価」演習の組織化
- ③国語科(言語教育)から他教科・他領域の学習を支える言語活動の開発

2. 点検・評価

①「言語モデル」を用いた目標・評価の見据え方の汎用性開発－後期の学部授業・集中講義で、学部生・院生に対し力強い手応えを得た。

②学習者の「表現」を読み取る「創造的評価」演習の組織化－後期から担当した学生・院生の卒業研究・修士論文研究で「言語活動の充実」に関わらせて新しい展開が得られた。

③国語科(言語教育)から他教科・他領域の学習を支える言語活動の開発－「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」において、他教科と連携をはかり教員養成のためのカリキュラムづくり、とくに教科書作成のベースを据えるうえで大きな役割を果たした。

以上の成果をもとに、次年度平成25年度においては科研費申請に向けて基礎的な作業を進める計画である。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

後半期から担当する予定の現職教員の研究テーマは、「作文指導研究」である。講演・講話等で話した内容に共鳴して大学院をめぐってくれた。

このことから、まず、しっかりした研究物をまとめる喫緊の必要性を強く感じている。学生・現職教員の興味や志を強く刺激できる内容を築いていきたい。

1. 原理性と実践性を兼ね備えた「国語科教員専門内容学」を構築する。
2. 研究としての基礎固めをもとに、現場の需要に合わせたわかりやすいテーマ設定をはかる。
3. 1・2の成果をTPOに合わせて資料化し、多くの場・機会をとらえて研究の必要性を訴え、志望活性化に結びつける。
4. 学会・科研・校内研修及び講話等の機会を生かし、大学院での研究へ積極的な勧誘を行う。

2. 点検・評価

1. 原理性と実践性を兼ね備えた「国語科教育専門内容学」を構築する一骨格は、成立に近づいている。

2. 研究としての基礎固めをもとに、現場の需要に合わせたわかりやすいテーマ設定をはかる－大学院の授業・修士論文研究指導・現場の授業実践に直接役立つ具体的教材・理論としての手応えを得た。

3. 1、2の成果をTPOに合わせて資料化し、多くの場・機会をとらえて研究の必要性を訴え、志望活性化に結びつける一個人的なゼミ生の担当数は2.5倍になったが、入試段階での国語コース受験者獲得には、結びついていない。やはり「著書」としての成果が必要である。

4. 学会・科研・校内研修及び講話等の機会を生かし、大学院での研究へ積極的な勧誘を行う一様々な機会をとらえて、勧誘を行った。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

1. 前期内地研究員研究期間は、1ヶ月に1回、学部ゼミを行う。
2. 後期は、HR及び学年通信の発行を再開する。
3. 大学院生の修士論文研究を後期から行う。

2. 点検・評価

1. 前期内地研究員期間は、1ヶ月に1回、学部ゼミを行うー体調不良時を除いて、完全に実施した。
2. 後期は、HR及び学年通信の発行を再開するーHRを毎週実施し、学年通信を29号まで発行した。
3. 大学院生の修士論文研究を後期から行うーM1生2名(中学校教師(非常勤)、高校教師(現職派遣))を迎えてゼミ指導を行った。

II-2. 研究

1. 目標・計画

1. 内地研究員研究のテーマ:「言語教育改善のための『対話環』の導出と応用」をまとめる。
2. 学位取得に向けて具体的な目途を立てる。
3. 内地研究期間も含め、科学研究にも積極的に関わり、個人研究及び共同研究の両方に力を注ぐ。
4. 学会役員・編集委員等の職責を全うし、学会の社会的役割に貢献する。

2. 点検・評価

1. 内地研究員研究のテーマ「言語教育改善のための『対話環』の導出と応用」の執筆は、6~7割ほどの達成に終わった。
2. 学位取得の途中手続きとして、2回の審査を通過した。しかし、研究員終了後、予定した研究を進めることが困難になっている。
3. 内地研究員期間後、20年間継続してきた科研グループから撤退せざるを得なくなった。個人的勤務環境変化のためである。
4. 学会研究部委員として、全国大学国語教育学会理事として5月富山学会の「課題研究」のコーディネーターをつとめた。次期編集委員に選出された。
5. 日本読書学会編集委員として論文査読に従事した。
6. 中国四国教育学会編集委員を9月まで勤め、職務に精励したが、内地研究員終了後、遠距離を通う時間的余裕がなくなり、任期半ばで退任した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

1. 大学内の校務分掌を全うする。
2. 後期大学院「夜間授業」をもつ。
3. 言語系国語コースの諸事業を役割に応じて担当する。

2. 点検・評価

1. 年度後半期大学院教務委員会委員の職務に従事した。
2. 年度後期、大学院夜間授業を初めて担当し、夜間20時までの授業の負担の重さを実感した。受講生も昼間の勤務があるため、課題等に工夫を要す。
3. 年度後期、連合大学院の各種業務に復帰した。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

1. 第13回徳島国語教育実践研究大会を8月に開催する。
2. 教育実践フィールド研究、教育実習、学部附属連絡協議会、附属校園の研究発表会に積極的及び協同的に支援をおこなう。
3. あらゆる機会・人をとらえて「共同研究」の可能性をさぐる。

2. 点検・評価

1. 第13回徳島国語教育実践研究大会(8月)は、内地研究員期間中であるため出席不可との大学の指示を受け、会長挨拶を書面読み上げで行った。
2. 教育実践フィールド研究、教育実習、学部附属連絡協議会、附属校園の研究発表会等、附属学校との協力関係は順調であった。
3. 「教育実践フィールド研究」では、国語科教育・国文学・国語学の教員との共同実践研究を行うことができた。
4. 教科内容学の研究プロジェクトにおける「教科書づくり」の基盤となる共同研究体制を開始した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

・内地研究期間(6ヶ月)の取得によって、国語コースには大きな負担をかけたこととお詫びし、心から感謝する。この6ヶ月はこれまで・これからの勤務と研究生活にとって重要な節目となった。しかし改めて、内地研究は40歳代までに取得する方が望ましいことを認識する。内地研究期間中(5~6月)にかつてなく体調を崩したが、期間内の回復に努めて何とか期間中に間に合い、結果的に大学の勤務にはあまり影響を及ぼさずに済んだ。しかし当初目的とした期間内の論文完成は達成できなかった。目標未達成は残念だが、研究自体が復帰後の教育・研究に有意な影響を及ぼしていることは確かである。